深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **「児」が心の中で思っていることが書かれている部分を、本文中から全て抜き出し、心情がどのように変化しているか、まとめてみよう。**

【答】①し出ださむを待ちて寝ざらむも、わろかりなむ（一六・3）　②さだめておどろかさむずらむ（一六・8）　③うれし（一六・10）　④ただ一度にいらへむも、待ちけるかともぞ思ふ（一六・11）　⑤いま一声呼ばれていらへむ（一七・1）　⑥あな、わびし（一七・3）　⑦いま一度起こせかし（一七・5）

▼ポイント▲　登場人物は会話文において心情を吐露する可能性が高いので、まずは「児」の会話文に注目するようアドバイスするとよい。①では「ぼた餅ができあがるまで寝ないで待つことで、いやしいと思われるのを避けたい」という気持ちが読み取れる。「児」が《無欲であるかのように装って》振る舞っている点に気づかせたい。一方で、②・③では「ぼた餅ができたら僧達がきっと起こしてくれるだろう」という《期待》と、思惑通りに事が運んだ《喜び》が描かれている。さらに、④・⑤では、「再度、いやしいと思われるのを避けたい」と考え、《無欲であるかのように装って》いることを読み取る。⑥・⑦では、《あてが外れて》ぼた餅を食べ損ないそうになり、焦っている気持ちがあらわれているであろう。

以上の変化をまとめることが、ここでのポイントとなる。

言葉と表現の解答例

1 **次の語の品詞と意味を、古語辞典で調べてみよう。また、現代語の意味との違いについて、まとめてみよう。**

(1)　**念じ（一七・1）（注）「念ず」で引く。**

(2)　**わびし（一七・3）**

【答】(1)　①心の中で強く祈願する。②ぐっとこらえて我慢する。ここは②。現代語の「念ずる」には様々な意味があるが、「心の中で神仏に祈る」「ものごとの成就を強く願う」など、①に近い意味になることが多い。古語では現代語と異なり、②の「我慢する」という意味があることを押さえておきたい。

(2)　①（思い通りにならず）つらい。②さびしい。③貧しい。ここでは①。一方、現代語の「わびしい」には「もの静かでさびしい」「あわれな」などの意味がある。現代語と古語の意味はかなり共通していて、生徒達は、両者の違いは少ないという印象を持つのではないだろうか。必要なものが欠落していたり、落ちぶれた状態を意味するという点をイメージできるのではないだろうか。

▼ポイント▲　古語と現代語の違いを実際に調べることで、言葉には「現代に至るまでに変遷した意味」と「現代まで継承されている意味」の双方を持ち合わせているということを、生徒達に気

づいてもらうことを目標としたい。ここで取り上げた語だけでなく、各自が気になった様々な言葉の意味についても主体的に調べるように促したい。

言語活動の解答例

1　**「僧たち、笑ふこと限りなし。」（一七・５）とあるが、僧たちが笑ったのはなぜか、話し合ってみよう。**

【解答例】

（案１）寝ていると思っていた児が、突然、要領を得ない形で返事をしてきたことで、児が寝たふりをしていたのだと気づいておかしかったから。

（案２）児が寝たふりをしていることに気づきながらもわざと起こさずにいたら、ぼた餅食べたさに我慢しきれなくなった児が、突然、要領を得ない形で返事をしたのが、想定を超えた反応で、面白かったから。

児が寝たふりをしていたことに、僧たちが気づいていたかどうかで、二通りの解答が想定されるだろう。（案１）は僧たちが気づいていなかったとするパターン、（案２）は僧たちが気づいていたとするパターンである。できれば双方を生徒達に示し、どちらの解釈に合理性があるかを話し合わせたい。

（案１）の場合には、古典の作品にしばしば確認される「登場人物のすれ違い」について言及することができよう。古典の作品では、登場人物同士の思惑がすれ違うさまがしばしば描かれる。合理的に生きることの難しさや、運命に翻弄される登場人物の生き方を、時に冷静に、時に共感を持って描出する作品が数多く存在するので、他の作品と比較しながら古典の特性について考えるきっかけにもなるのではないだろうか。

（案２）の場合には、説話の演劇的な語り口の面白さにも言及できるのではないだろうか。この作品の読者は、僧たちが児の寝たふりに気づかずにぼた餅を食べ始めてしまったと感じながら読み進めてしまうが、実は僧たちが児の寝たふりに気づいていないように振る舞い、演じていたことが、最後に明かされている、という解釈である。私たち読者も、僧たちの演技にだまされていたと考えられないかという提案、とも換言できよう。ただ単に昔話を紹介するのではなく、その場に居合わせたような臨場感あふれる語り口で描写する手法は「宇治拾遺物語」で散見され、説話の語り口の面白さを認識するための、一つの手がかりになるのではないだろうか。

（小林　俊洋）